

日本英文学会東北支部

第 71 回大会資料

時：2016 年 11 月 19 日（土）・20 日（日）

所：秋田カレッジプラザ

（秋田市中通 2 丁目 1-51 明德館ビル 2 階）

日本英文学会東北支部事務局

（〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目 3-1 東北学院大学英語英文学研究所内）

電話：022-264-6401／ファクス：022-264-6530

第 71 回大会懇親会のご案内

第 71 回大会懇親会を以下のように開催致します。詳細および申し込みについては、10 月に支部会員宛に別送する案内をご覧ください。今回は立食形式ではないため、事前に必ず申し込みが必要です。

【日時】2016 年 11 月 19 日（土） 午後 6 時～8 時

【場所】無限堂大町本店 （稲庭うどんときりたんぽが美味しい秋田の郷土料理のお店です）
（秋田県秋田市大町 1-3-2）

日 本 英 文 学 会 東 北 支 部

2016 年度 大会役員一覧

（敬称略・五十音順）

支 部 長	大河内 昌						
副 支 部 長	岩田 美喜						
理 事	飯田 清志	石橋 敬太郎	宇津 まり子	遠藤 健一			
	奥野 浩子	金子 義明	川田 潤	佐々木 和貴			
	鈴木 亨	鈴木 雅之	村上 東	箭川 修			
大 会 準 備 委 員	梶 理和子	菊池 秋夫	田島 優子	野口 元康			
	五十嵐 啓太	佐藤 元樹					
開 催 校 委 員	佐々木 和貴						
事 務 局	福士 航（事務局長）	井出 達郎（事務局員）					

日本英文学会東北支部第 71 回大会プログラム

時：2016 年 11 月 19 日（土）・20 日（日）

所：秋田カレッジプラザ（秋田市中通 2 丁目 1-51 明徳館ビル 2 階）

第一日 11 月 19 日（土）

理事会 11 時より（小講義室 4）

新理事会発足準備会 12 時より（小会議室 4）

開会式 13 時より（講堂）

□開会の辞

日本英文学会東北支部長 大河内 昌

研究発表

第 1 発表 13:30 － 14:05 第 2 発表 14:10 － 14:45 第 3 発表 14:50 － 15:25

第 4 発表 15:30 － 16:05 第 5 発表 16:10 － 16:45

第一室（大講義室）

司会 東北大学名誉教授 鈴木 美津子

1. 海のすじとオラン・ラウト

—キプリング「交通の妨害者」（1891）における 19 世紀末東南アジア

高崎健康福祉大学講師 松田 幸子

2. 「ぼくはいつまでも、いつまでも、いつまでも生きるんだ」

—『秘密の花園』とモダニズムの出現

福島大学准教授 高田 英和

3. Angela Carter の 60 年代～70 年代に関する一考察

東北学院大学特任准教授 相田 明子

司会 山形大学教授 中村 隆

4. 明治が見たビクトリア朝の貧困—挿絵を通して

秋田県立大学准教授 加賀谷 真澄

5. 英文学における羊の表象とその変遷—夏目漱石の講義録を手掛かりに

秋田県立大学助教 江口 真規

第二室（小講義室 2）

司会 東北学院大学准教授 井出 達郎

1. F. Scott Fitzgerald の最晩年を再考する手がかりとしての *The Pat Hobby Stories*

—A Creditable Reproduction to the Previous Writers

北海道大学大学院 林 俊一朗

司会 仙台白百合女子大学准教授 山田 恵

2. Alice Walker の *Meridian*(1976)にみる個の確立と歴史の継承

東北学院大学非常勤講師 星 かおり

司会 岩手大学教授 齋藤 博次

3. Linda Snopes Kohl の女性像—Faulkner の後期作に於ける女性像の現代性

東京都立産業技術高等専門学校准教授 海上 順代

4. *The Sound and the Fury* における南部白人 Quentin Compson の苦悩とイタリア系移民の兄妹の役割

東北大学大学院国際文化研究科准教授 山内 玲

第三室 (小講義室 1)

司会 福島大学准教授 佐藤 元樹

1. 派生名詞句と省略現象

東北大学大学院 佐藤 亮輔

2. ミャンマー語、英語、日本語における省略

東北大学大学院 李 成曼

第二日 11月20日 (日)

SYMPOSIA (10:00~13:00)

第一部門 (講堂)

英文学とヴィジュアル・カルチャー —表象の多様性をめぐって

司会・講師 山形県立保健医療大学准教授 梶 理和子

講師 東北生活文化大学短期大学部准教授 佐藤 恵

講師 文芸評論家 小野 俊太郎

講師 山形県立米沢女子短期大学講師 小林 亜希

第二部門 (大講義室)

1950年代アメリカの「カミング・アウト」した作家たち

—Tennessee Williams、Truman Capote、James Baldwin—

司会 秋田大学教授

村上 東

講師 東北文化学園大学 (非)

藤倉 ひとみ

講師 東北大学大学院

徳永 慎也

講師 宮城学院女子大学 (非)

清水 菜穂

第三部門（小講義室2）

動詞と形容詞の項構造・構文とレキシコン

司会・講師	東北大学准教授	長野 明子
講師	和光大学講師	阿部 明子
講師	芝浦工業大学特任准教授	深谷 修代
講師	津田塾大学大学院	大高 茜

< 第一日 >

11月19日（土）13時30分

研 究 発 表

第一室（大講義室）

司会 東北大学名誉教授 鈴木 美津子

海のすじとオラン・ラウト

—キプリング「交通の妨害者」（1891）における 19 世紀末東南アジア

高崎健康福祉大学講師 松田 幸子

本発表では、キプリングによる短編小説「交通の妨害者」（“The Disturber of Traffic,” 1891）を取り扱う。この小説で描かれるのは、現在のインドネシア海域に存在するフロレス海峡に赴任してきたイギリス人の灯台守と、そこに暮らす「オラン・ラウト」（Orang Laut）である。ここでは、19 世紀末の東南アジアにおける西洋列強の競合を確認しつつ、この海域を拠点としていた海上民オラン・ラウトについて論じる。そうすることで、テキストに登場する記号、海の「すじ」とはいったい何を意味するのかを明らかにし、「交通の妨害者」においては、キプリングが、帝国主義者・植民地主義者というよりはむしろ、そのような理念に疑問を呈しながら、東南アジアにおける越境の可能性を見出していることを論じることが、本発表の目的である。

「ぼくはいつまでも、いつまでも、いつまでも生きるんだ」

—『秘密の花園』とモダニズムの出現

福島大学准教授 高田 英和

フランシス・ホジソン・バーネットの『秘密の花園』（1911）において重要であるのは、1）虚弱の少年、コリンの発達が一貫して正当化されていること、それと関連しながら、2）植民地帰りの少女、メアリーの姿が最終的に物語から消されていることである。たとえば、シャーリー・フォスターとジョディ・シモンズ（『ケティの読んだもの——「古典的」少女物語のフェミニズム的再考』[1995]）はこれを家父長制の保持、保守主義として位置づけようとするが、むしろわれわれは、1）イギリス帝国批判の正論の登場のなかで、英国のリベ

ラリズムがレッセフェール（自由放任主義）からニューリベラリズムへと転換すること、2）いわゆるメインストリームの小説において、リアリズムが終わり、モダニズムが新たな価値として台頭することに関連づけたい。『秘密の花園』が、世紀転換期を境とするイギリス帝国の構造上の変容、すなわち、植民地主義から帝国主義への転回と密接に関係していることを明らかにしたい。

Angela Carter の 60 年代～70 年代に関する一考察

東北学院大学特任准教授 相田 明子

Angela Carter(1940-92)は西欧文化圏のあらゆる領域に浸透する家父長制的で神話的な思考体系をいったん解体し、我々の思考を形成する様々な文化・慣習の根底を成す事柄の真正性を暴くことによって、読者を真実のもとに晒しだす。本発表の目的は、Carter が「自己犠牲の神話を共有するためのセンチメンタルな女性の作家群の系列に加わることを拒み」「フェミニズム批評と女性運動に公然と従事する最初の英国女性作家のひとり」(Showalter)になって行くプロセスを考察することである。

1960 年代の女性運動やフランス構造主義の隆盛といった時代的な要因をふまえ、Carter 自身の分岐点とされる 60 年代後半、特に 3 年間にわたる日本での生活経験の周辺に焦点をあてることで、Carter が文化的・社会的なシステムに対して懐疑的な視点を持つようになる経緯を辿りたい。

司会 山形大学教授 中村 隆

明治が見たビクトリア朝の貧困―挿絵を通して

秋田県立大学准教授 加賀谷 真澄

岩倉使節団（1871 年）のメンバーであった木戸孝允は、ロンドン滞在中にイースト・エンドに案内され、貧しい人々の暮らしをみている。これは、イースト・エンドが、すでにツーリズムの対象になっていたことを示している。1850 年前後から、ロンドンの貧民街は新聞・雑誌に取り上げられ、広く世に知られていた。

奇妙なことに、この時代の貧困の情景は、約 40 年後の日本で紹介される。桜田文吾の『貧天地飢寒窟探検記』（1893 年）は、1850 年頃の『パンチ』の挿絵やメイヒューと思われる人物について言及しながら、イギリスの貧困状態を現在進行形の事象のように紹介している。この時間的なずれは何を意味しているのだろうか。

本発表は、明治初期の日本人が見たイギリスの貧困の情景を、挿絵を通じて考察する。さらに、40 年の時を経て日本で紹介された要因を、日英双方の社会・政治的文脈から分析し、比較文化的な視点から論じる。

英文学における羊の表象とその変遷―夏目漱石の講義録を手掛かりに

秋田県立大学助教 江口 真規

夏目漱石『三四郎』（1908）には、^{ストレイシープ}「迷羊」という言葉や羊の表現が頻繁に見受けられる。国内の羊の飼育頭数が限られていた中で、漱石は研究対象としていた英文学における羊の表象を受容し、『三四郎』の創作に応用したのではないかと推測される。

『三四郎』の「迷羊」と英文学については、『トム・ジョウンズ』（1749）等の作品にみられる羊の表現との関連性が指摘されてきた。本発表では、「迷羊」という言葉に加え、漱石の羊に関する概念や知識が英文学に拠

っていたことを明らかにする。漱石はジェイムズ・トムソンの『四季』(1726-1730) やアレグザンダー・ポープの『牧童歌』(1709)をはじめ、羊のいる風景をうたった英詩を取り上げ、耕作地などの物質的状況と文学・芸術の相関性を英文学講義の中で論じている。これら漱石の講義録を手掛かりに、16 世紀から 18 世紀英文学における羊の表象の変遷を、囲い込みに代表される農業政策との関係から考察する。

第 二 室 (小講義室 2)

司会 東北学院大学准教授 井出 達郎

F. Scott Fitzgerald の最晩年を再考する手がかりとしての *The Pat Hobby Stories* —A Creditable Reproduction to the Previous Writers

北海道大学大学院 林 俊一朗

F. Scott Fitzgerald (1896-1940) は死の直前まで、ハリウッドの“scenario hack”を主人公に据えた *The Pat Hobby Stories* (1962) を書き続けた。*Hobby Stories* は、Fitzgerald のハリウッドにおける苦境を戯曲化したものにすぎないという認識から、批評家から無視され続けていた。だが Fitzgerald は些細な箇所にも綿密に修正を施し、新しい短編が完成するごとに順番を入れかえ、出版直前まで手を入れ続けるこだわりを見せていた。過去の栄光にすぎり、酒に溺れ、自分では何も生み出せない Pat は、作家としての名声を取り戻そうとジンを片手に苦闘していた Fitzgerald による自己投影に過ぎないのかもしれない。それでも、自らを“mortgaging myself”し“resources that I did not possess”で生きている人間と定義した作者が、他人の idea を拝借して生きながらえる男を一心不乱に書いていたことは一考に値する。*Gatsby* で自らを“sprang from his Platonic conception”と規定した男の夢の終焉を描いた作者が、*Hobby Stories* では自分の名前を“credit”に残そうと躍起になる男の生存競争を書き続けた事実から、私たちは何を読み取るべきか。

司会 仙台白百合女子大学准教授 山田 恵

Alice Walker の *Meridian*(1976) にみる個の確立と歴史の継承

東北学院大学非常勤講師 星 かおり

本発表では Alice Walker の長編小説 *Meridian*(1976) を扱い、主人公 Meridian Hill の自我の確立が、黒人の歴史の継承が不可分なものであることを示したい。

Meridian は Walker の 2 番目の長編小説で、彼女自身が体験した 1960 年代の公民権運動の様子が描かれた自伝的小説である。*Meridian* は黒人女性であるが故に抑圧される社会の中で紆余曲折を経て、自己実現に至るのだが、集団の歴史と *Meridian* 個人の自我の間に葛藤が全くないわけではなかった。

Meridian は暴力を是とする急進的な革命家として生きることも、己を滅して家庭に入り良妻賢母として伝統に従い生きていくこともできない。そのような自分を認めつつ、それでも黒人の共同体の一員として社会の変革に携わる決意を固める。*Meridian* の自己の確立は、己の内面に抱えた矛盾を抱えたまま、葛藤に耐え抜き生きていく覚悟を定め、黒人の歴史を継承することで果たされることを示していく。

Linda Snopes Kohl の女性像—Faulkner の後期作に於ける女性像の現代性

東京都立産業技術高等専門学校准教授 海上 順代

Faulkner の後期作は批評でも論じられることが少ないが、後期作で中心的な女性登場人物となる Linda Snopes Kohl の女性像を再検討したい。後期作に関しては Faulkner の「筆力の低下」や社会的なメッセージ性の高さが否定的に捉えられているが、1940 年後半から 50 年代に至るアメリカの価値観の変容、社会情勢、そしてフォークナーの私的生活を考慮すると作品のスタイルの変化は必然的であったと思われる。今回の発表では Snopes 三部作の最後の作品 *The Mansion* (1959) を中心的なテキストとして扱いたい。Linda は *The Mansion* で「ニューヨークに出て芸術家と同棲後、結婚、スペイン市民戦争で夫を亡くし自らも身体に障害を抱えることとなり、アメリカ南部共同体に帰ってきた女性」となり、それまでの Faulkner が描く女性像としては極端にまでに性質が異なっている。アメリカでの女性運動の隆盛といった時代背景を合わせて、Faulkner が描いた「独身女性」、「夫のいないいない女性」の系列に入る人物として Linda 像を再検討したい。

The Sound and the Fury における南部白人 Quentin Compson の苦悩とイタリア系移民の兄妹の役割

東北大学大学院国際文化研究科准教授 山内 玲

本発表は William Faulkner の *The Sound and the Fury* におけるイタリア系移民の兄妹の役割を考察することを目的とする。20 世紀初頭から中盤までのアメリカ社会の移民感情とイタリア系移民の同化という歴史的文脈に本作を位置づけた上で、Quentin とその妹 Caddy との対応関係を連想させるイタリア系移民の兄妹を、自殺に至る南部白人青年の意識の流れに対する単なる書割にとどまらず、その精神的崩壊の過程を促進する役割を担っていることを明らかにする。議論の過程で、Quentin の近親姦幻想を 1920 年代の移民排斥主義の象徴としてみनाす Walter Benn Michaels の *Our America* において捨象された知見、即ちその幻想を南部白人社会の精神性の変種とみなす先行研究の知見の意義を再確認するとともに、Caddy の記憶の投影と解釈されるのに加え、白人社会の他者たる黒人と同一視された移民として、従来の批評において二重に他者化されてきた「黒い」イタリア系の娘の役割として、Quentin の白人としての存在様式を問い直す積極的な意義を見出したい。

第三室（小講義室 1）

司会 福島大学准教授 佐藤 元樹

派生名詞句と省略現象

東北大学大学院 佐藤 亮輔

これまで、派生名詞句を先行詞とした動詞句省略が可能であることが示されてきた (Johnson (2001))。しかし、派生名詞句を先行詞とした擬似空所化については、十分に研究がなされてこなかったように思われる。本発表では、Merchant (2008, 2013) に従い、動詞句省略は vP の削除であり、擬似空所化は VoiceP の削除であると仮定

する。その上で nP と VoiceP は競合関係にあると提案する。この提案に基づく、派生名詞句は nP-vP-RootP という構造を持つ。よって、派生名詞句を先行詞とした動詞句省略は vP を削除するため同一性が保持されるので可能であるが、擬似空所化は VoiceP を削除するため nP と VoiceP の間で同一性が保持されず不可能であると説明される。本研究は、動詞句省略と擬似空所化の違いから派生名詞句の内部構造を明らかにしようとする新たな試みである。

ミャンマー語、英語、日本語における省略

東北大学大学院 李 成曼

本研究発表では、ミャンマー語、英語、日本語における省略表現を比較し、ミャンマー語における省略は、英語ではなく、日本語に見られる省略と同じパターンを示すことを論じる。英語とミャンマー語における省略は類似点と相違点がある。類似点としては、英語とミャンマー語の省略箇所には、厳密読みと緩い読みが許される。相違点としては、英語は動詞句全体を省略するのに対し、ミャンマー語は項のみを省略している。これらの類似点と相違点に基づく、Huang (1991)等が提案する動詞句省略分析が当てはまるように思える。しかし、本論では、ミャンマー語の空項は動詞句省略として分析することができないことを示す。その上で、Saito (2007)と Şener and Takahashi (2010)の Anti-agreement 仮説に基づき、ミャンマー語の省略を日本語の省略と同様に、項削除として分析する方が妥当であることを論じる。

< 第二日 >

11月20日(日) 10時

SYMPOSIA

第一部 門 (講堂)

英文学とヴィジュアル・カルチャー —表象の多様性をめぐって

司会・講師	山形県立保健医療大学准教授	梶 理和子
講師	東北生活文化大学短期大学部准教授	佐藤 恵
講師	文芸評論家	小野 俊太郎
講師	山形県立米沢女子短期大学講師	小林 亜希

近年、(英)文学を学ぶ学生たちがレポートや卒業論文を書くときに、(原典ではなく)映像作品を研究対象とすることは多くなっている。これを文学離れの一環として批判的に見ることもできるが、映像化されることで原書が目される肯定的側面もそこにはある。また、そもそも文字で書かれていないと「文学」ではないのかという根本的問題が提起されるかもしれない。少なくとも英文学は、ハリウッドで連綿と続くシェイクスピアの映画化や、イギリスの(ポスト)ヘリテージ映画によって、「読まれる」可能性が広がっていることは間違いないだろう。その一方で、言語が視覚化されるときに、時間や空間、物体や行為等をめぐる二つのメディア

の相違や限界ゆえに、作品の特性が損なわれる可能性を否定することもできない。

本シンポジウムでは、17世紀から現代にいたる、舞台、絵画、映画等をあつかうことで、英文学作品と視覚表象の関係性を探ることを目的としている。ことばとイメージとの関係（対立・矛盾）、言語表現に現れる演劇性、映像化の（不）可能性、あるいは小説の映画に対する意識（対抗・依存）といった問題を考察すると同時に、時代とともに変化する文学作品と視覚文化との関係についても追ってみたい。このような作業を通じて言語と視覚による表象の多様な可能性を確認し、フロアとともに英文学研究にまつわる現状の問題点と新たな方向性を議論できることを期待している。

言葉と身体 / 想像と視覚

梶 理和子

シェイクスピアが言葉によって観客の想像力に訴えかけ、こころの中で映像化させたのに対し、女優が登場する王政復古期の舞台では、リアルな身体を利用した視覚的演出が多用されるようになる。しかし、蝋燭を頼りとする照明の不十分な劇場の視覚的体験は、現在の私たちの視覚体験とは大きく異なっていたことも忘れてはならない。時代が進み、演劇のスペクタクル化という形で視覚性は更に重要となるが、同時にそれは、劇場空間の巨大化にともなう、役者と観客の距離的隔絶も意味し、個々の表情などは判別しにくい状況ももたらしていた。

本発表では、このような、いわば＜視覚的劇場＞の登場によって、舞台上では見えない（見えにくい）ことも、観客は、これまでとは違う形で想像することを要請される状況も存在していたことに留意したい。そこで、劇場での視覚体験が単純に感覚によるものではなく、想像力を借りることで作り出されるイメージも重要な役割を果たしていたという点から、＜視覚的劇場＞を再検討することを目的とする。舞台上の女優、装置、小道具といった視覚的要素と、ことば、想像力、共感など非視覚的要素との相互依存性で、この時代の演劇は新たな体験を作りだしていたことを明らかにしたい。時間が許せば、舞台作品の映画化についても、上記の観点から検討したい。

言葉とイメージ ―オースティン作品における絵画的表象

佐藤 恵

18世紀になるとシェイクスピア劇をはじめ多くのテキストが挿絵入りで出版されるようになったが、テキストとイメージの相関関係においてとりわけ注目すべきは、新たな文学ジャンルとして登場した小説と、主に正面向きで観客を意識した演劇の構図で描かれたその挿絵である。加えて、言葉による鮮やかな描写で登場人物の生き生きとした視覚イメージを喚起する小説の絵画的手法は、あたかも演劇の一場面を目にするような心象を小説の読者に与えていたことだろう。一方絵画でも、当時女優の肖像画が人気となっており、単なる個人肖像画とは違って十八番の役に扮して描かれたその女優たちのイメージは、見る人に舞台の場面を想起させ、物語を提示していた。

本発表では、当時のこうした小説と絵画を取り巻く状況を踏まえながら、風習喜劇の系譜をひく『高慢と偏見』（1813）を中心にオースティン作品の絵画的表象を考察することによって、そこに孕むイメージの対立やその風刺画的視点の問題について明らかにしていきたい。さらに、実際にオースティン作品が視覚化して提示さ

れた時、その絵画的表象がどのように描かれ、また描かれない（描けない）のか、1890年代にヒュー・トムソンによって描かれた挿絵や、キーラ・ナイトレイ主演映画『プライドと偏見』（2005）を参照しながら見ていければと思う。

「死者」と「不死者」の表象をめぐって

小野 俊太郎

19世紀半ばに写真技術が急速に大衆化することで、リアリズム表現の規範となったが、同時に心霊写真や裸体写真がたくさん撮影された。見える技術が発達すると、物理的あるいは社会的に「見えないもの」への関心が拡大する。また露光時間のせいで、移動する物体が捉えにくかった時に、タブーともなりえる死体が写真の被写体にもなった。アメリカの南北戦争は戦死者の写真を本格化させた。ところが世紀末に、動かないものに生命が宿ったように錯覚させる「動く写真＝映画」が登場したせいで、死者が動きだしたり、周辺に死者がいるという感覚を文学がとりこむことになる。それは演劇や絵画からのインパクトとはまた別のものである。

本発表では、死者の記憶を詩的文体のなかで蘇らせる James Joyce の“The Dead”(1914)と不死者の記憶を記録で物語る Bram Stoker の *Dracula*(1897)とを、アイルランド性も含めて強引に同じ俎上にとりあげて、「動く写真」との関係を考えてみることにする。そして時間に余裕があれば、映画が誕生したのと同じ年に発表された H.G.Wells の“The Time Machine”(1896)なども参照しながら、文学における生死や時間の連続性の表現に、映画が与えたインパクトについても考えてみたい。

「蠅の王」は語ることができるか 一核時代の表象不可能性

小林 亜希

20世紀は映画が人々に広く受容された時代であったと同時に、表象不可能なカタルストロフィと暴力の時代でもあった。第二次世界大戦における人間の蛮行をアレゴリカルに描いた William Golding の『蠅の王』 (*Lord of the Flies*, 1954) は、人間本性に宿る「悪」の問題を扱ったアレゴリー小説であるが、新たな核戦争の恐怖に怯える核時代のコンテキストの中で読まれたことにも留意する必要があるだろう。Peter Brook によって映画化された『蠅の王』（1963）は、冒頭から核ミサイルと子供たちの疎開風景の「スチル写真」を挿入することで、物語の同時代性を原作以上に強調している。しかしながら、原作と映画に共通しているのは、暴力を明示的に語ることを可能な限り忌避し、それぞれ別なやり方で「蠅の王」を表象しようとしたことにあるのではないかな。

本発表では、小説のテキスト分析と映画のショット分析を突き合わせることによって、「語らないこと」と「映さないこと」の緊張関係から、核時代における表象不可能性について考察したい。また、1950年代に流行した「心地よい破壊」と呼ばれる SF ジャンルとイギリスの映画運動であるブリティッシュ・ニューウェイヴとの関わりについても言及するつもりである。

第 二 部 門 (大講義室)

1950 年代アメリカの「カミング・アウト」した作家たち —Tennessee Williams、Truman Capote、James Baldwin—

司会	秋田大学教授	村上 東
講師	東北文化学園大学 (非)	藤倉 ひとみ
講師	東北大学大学院	徳永 慎也
講師	宮城学院女子大学 (非)	清水 菜穂

はじめに—シンポジアムの目的

清水 菜穂

欧米社会でそれまで一つの行為にすぎなかった「同性愛」が、主体のアイデンティティを表すものへと変化したのは、19世紀後半だったと言われている。20世紀に入ると、「同性愛」に対する嫌悪が広まり、「同性愛」は検閲の対象ともなった。異性愛＝結婚が「正常」だとするディスコースが強化され、科学の名のもとに「同性愛」は「病」とみなされた。医学界で正式に「同性愛」が精神疾患のリストから除外されるのは、ゲイ・ライツを求めるゲイ・ムーブメントが推し進められた1970年代まで待たねばならなかったのである。

しかし、「同性愛者」のアイデンティティ形成やコミュニティ形成に、文学作品は重要な役割を果たした側面がある。赤狩り全盛の1950年代のアメリカでは、同性愛者の逮捕数は共産主義者よりも多かったと言われているが、厳しい検閲が繰り返されたこの時代にも、自らの作品で「同性愛者」であることを「カミング・アウト」した、あるいはそうとみなされた作家が登場した。Tennessee Williams (1911-83)、Truman Capote (1924-84)、James Baldwin (1924-87) である。作品に内在する、解放すると同時に隠蔽もする三者三様の同性愛的欲望とはどのようなものなのか。作家のセクシュアリティは作品の文学性とのように絡みあっているのか。彼らの作品が刊行されるに至る社会的変容はいかなるものであったのか、あるいはテキストそのものに、出版を可能にした要因があったのだろうか。3つの報告を通して考えてみたい。

「真実」と「欺瞞」—『熱いトタン屋根の猫』における隠蔽

藤倉 ひとみ

劇作家 Tennessee Williams は、同性愛を主題の一つとして描いている。『欲望という名の電車』(A Streetcar Named Desire, 1948) や「去年の夏突然に」(“Suddenly Last Summer,” 1958) は、同性愛と死を結びつけて描かれている。『熱いトタン屋根の猫』(Cat on a Hot Tin Roof, 1955) では、世間から同性愛者だと見なされていると思い込むブリック (Brick) を主人公とし、「真実」と「欺瞞」をキーワードに作品が展開する。金銭欲や性欲などあらゆる人間の欲望を露呈させる中で、作者はブリックの父や妻を「真実」を語る人物として登場させ、「真実」を語る者＝生命力に溢れる人間として描いている。しかし、一方で、ブリックは最後まで「真実」を語ることなく、生きながら死んだようにして酒に溺れる。その原因は、彼と同性愛の関係にあったとされる友人の自殺であることは明らかである。また、異性愛が健全で生産的なもので同性愛が不毛なものであるという議論

が登場人物たちの間にたびたび挙がることにも、作者の意図が読みとれる。ブリックと自殺した友人の関係から、ブリック自身の同性愛をめぐる「真実」と「欺瞞」とは何かを読み解き、ブリックが最後まで誰に対して何を「隠蔽」しているのかについて考察したい。

Truman Capote の「同性愛」観—同性愛の表現をめぐる

徳永 慎也

Truman Capote は実生活において同性愛者であることを隠すことはなかった。そのため、同性愛者たちによる権利獲得運動の熱気が高まる 1970 年代において、彼は同性愛者たちから一目置かれる存在であったと言われている。

カポーティの作品には同性愛者であると考えられる人間たちが多く登場する。例えば、*Other Voices, Other Rooms*(1948)においては、女性らしく振る舞うことに抵抗し、女性への愛に芽生える少女や、過去に恋した男性を女装して思い続ける男性が、少年 Joel に大きな影響を与える。*Breakfast at Tiffany's* (1958) に登場する Holly は、語り手に自身のレズビアン的性向を当然のことにように打ち明ける。さらに、ノンフィクション・ノベルと銘打って発表された *In Cold Blood*(1965)においては、死刑囚 Perry Smith の同性愛的経験や、彼の性格が「女々しい」という点が描かれている。しかしながら、同性愛の表現や登場人物たちによる同性愛の受け止め方は作品それぞれ異なっている。

本発表では、カポーティ作品において同性愛がどのように描かれ、またその描かれ方がどのように異なっているかを考察する。そこから、作家としてのカポーティの同性愛観を明らかにしたい。

音楽という仕掛け—人種、罪、欲望

清水 菜穂

本報告では、黒人作家 James Baldwin の作品における同性愛について分析する。社会において唾棄され嫌悪される同性愛は、彼の作品では、死、病、犯罪といった負のイメージが担われている。しかも社会の最下層である黒人の同性愛となれば、その負性は強化され、容易に「悪」と結びつけられることになる。しかし、作品で前景化されるのはアメリカ社会における人種関係であり、そうした過酷な人種差別がもたらす苦悩の歴史は、全編に流れるブルーズやジャズ、ゴスペルといった音楽によって表象され、音楽は登場人物の苦悩を浄化し克服するエネルギーを象徴する効果を生みだしている。ボードウィン作品に共通するこうした音楽表現は、ホモフォビアの激しい時代に同性愛を描く小説が刊行されるための必要不可欠な仕掛けであったと言えるだろう。

長編第二作 *Giovanni's Room* (1956) で明らかにカミング・アウトしたボードウィンは、公民権運動のスポークスマンとしての名声が高まる中、黒人コミュニティ内のホモフォビアによる攻撃も非常に激しいものだった。しかし、幼くしてキリスト教の少年説教師だった彼自身もまた、同性愛に対する内なる宗教上の罪意識から生涯逃れることはなかった。「同性愛小説」の刊行を可能にするための戦略として考えられるブルーズ等の音楽表現からは、作家自身の同性愛的欲望の解放をも読みとることができると同時に、そこには同性愛に対する罪意識や葛藤もまた隠蔽されていることを明らかにしたい。

第 三 部 門 (小講義室 2)

動詞と形容詞の項構造・構文とレキシコン

司会・講師	東北大学准教授	長野 明子
講師	和光大学講師	阿部 明子
講師	芝浦工業大学特任准教授	深谷 修代
講師	津田塾大学大学院	大高 茜

英語の動詞・形容詞の項構造・構文は、言語研究という観点からも、英語教育という観点からも、興味のつけないトピックである。言語研究に対して項構造・構文が提起する古典的問題は、人間の言語知識 (文法) の一部としての語彙知識の性質、レキシコン (心的辞書) の存在とその中身であろう (Ramchand 2008: ch.1, 岩田 2012, 小野・由本 2015)。レキシコンを言語記号の記憶装置と考える場合、動詞や形容詞の多義性や項構造の交替は統語論や語用論にゆだねられるだろう。他方、語の多義性や項構造の交替こそ、レキシコンが単に記憶装置ではなく記号操作の機能も持つ自律的で多元的なシステムであることを示していると考えられる。本シンポジウムでは、4 人の講師が、英語の動詞・形容詞の項構造・構文の諸現象に敢えて互いに異なる観点からアプローチすることにより、レキシコンの役割についてボトムアップ的に考えてみたい。

動詞：way 構文 (阿部)、壁塗り構文 (深谷)

形容詞：tough 構文と worth/worthwhile 構文 (大高)、名詞派生形容詞構文 (長野)

また、理論上の問題にはコミットせず、英語の学習や英語教育のために構文の知識を得たいという人にも有益な場となるようにしたい。

Way 構文における非能格性について

阿部 明子

自動詞の「非対格性」と「非能格性」は、これまで様々な観点からその妥当性の検証が行われてきている。本発表で取り上げる Way 構文に関しても、Marantz (1992) や Levin and Rappaport Hovav (1995) は、他動詞に加え非能格動詞のみが生起可能であるとし、「非能格性制約」を主張している。

- (1) a. Sam joked his way into the meeting.
b. * She arrived her way to the front of the line.

それに対して高見・久野 (2002) は、以下の(2)で示されているように、非対格動詞であっても生起可能な場合があると指摘し、多くのデータ観察に基づいた機能的分析を提示している。

- (2) The barrel rolled its way down the alley.

本発表では Way 構文の非能格性に関して、一見すると対立している上記の先行研究は相補的な関係にあり、両知見が融合することでその本質が見えるのではないかという折衷案を提示する。具体的には、中島 (2005) や Nakajima (2006) が提案する副詞的同族目的語という考え方を参考にし、(2) は one's way を含む動詞後の要素が

付加詞としてしか解釈できない「周辺の」な Way 構文であるため、非能格制約に従わないのに対し、(1)のような、one's way が項としても解釈され得る典型的な Way 構文については、非能格性制約が保持されると主張したい。

壁塗り構文日英比較：「塗る」と spray に基づく考察

深谷 修代

壁塗り構文とは、(1a, b) のように、交替が可能な構文をいう。

- (1) a. 壁にペンキを塗る。
- b. 壁をペンキで塗る。

深谷 (2016) は、17 の辞典を用いて「塗る」の定義と用法を調べ、4 つのタイプに分類した (2)。

- (2) Type A: 〜に---を 「壁にペンキを塗る」
- Type B: 〜を---で 「壁をペンキで塗る」
- Type C: 〜を 「壁を塗る」
- Type D: ---を 「ペンキを塗る」

Type B は、17 冊中 4 冊の辞典に限定して、記載されていることがわかった。さらに、青空文庫のデータから、Type A は 518 例中 232 例、Type B はわずか 46 例だった。Iwata (2008)、高見・久野 (2014) と同様に、両タイプは別々の基本構文を持つと仮定するが、深谷 (2016) では、Type B は Type C から形成されると主張した。

本発表では、英語の spray も深谷 (2016) と同様の手順で分析を行う。例えば、*Longman Dictionary of Contemporary English* によると、(3) のような例文が掲載されている。

- (3) a. Someone had sprayed blue paint over his car.
- b. She sprayed herself with perfume.

「塗る」と spray の辞書的概念およびデータを比較し、当該動詞の本質を追究する。そして、「塗る」と spray の心的辞書は、どのように満たされるのか最適性理論の枠組みを用いて分析をする。また、心的辞書内で、単語間の連結について検討する。本研究発表では、豊富なデータを提示し、データと理論の側面から日英を比較していく。

英語の Tough 構文と Worth/Worthwhile 構文について

大高 茜

生成文法理論においては、人間は生まれつき言語知識を持っており、生後耳にした情報をもとに個々の言語に特有の知識を獲得する、と想定されている。これまで、生得的な言語知識がどのような性質を持つのか、ということを探明するために、意味や音、語や文の成り立ちなど、様々な視点から、個々の言語の母語話者の知識の分析や比較が行われてきた。そしてそれを通して、母語話者の知識の多様性と共通性、さらにそれらの関係が明らかにされてきた。

本研究では、極小主義統語論の視点から英語の Tough 構文と Worth/Worthwhile 構文について考察し、それを手がかりに、言語知識の性質について検討する。

- (1) This book is easy to read. (Tough 構文)

(2) This book is worth/worthwhile reading. (Worth/Worthwhile 構文)

具体的には、まず、Tough 構文の派生に関与していると考えられる移動 (Tough 移動) の特徴を、Hicks (2009) 等の先行研究をもとに確認し、Worth/Worthwhile 構文の派生に関与していると考えられる移動の特徴を、Clark (1990), Safir (1991) 等の先行研究をもとに確認する。そして、Tough 移動との比較を踏まえて、Worth/Worthwhile 構文に関与する移動について検討を加える。最後に、その検討から得られた知見が、言語知識の性質に対してどのようなことを示唆するのかを考察する。

英語の名詞由来性質形容詞の新たなタイプ “Represent N”

長野 明子

本発表では、派生形態論 (名詞から形容詞への派生) と項構造・構文の関係について考える。英語の場合、内項をとる名詞由来形容詞、すなわち主語の属性叙述を許す性質形容詞には、Similative 類 “Like N” と Possessive 類 “Have N”があるとされる (Beard 1995, Bauer et al. 2013, Dixon 2014)。

- (1) a. *monsterish, summerish, townish, James-Deanish* “Like N”
b. *beautiful, insightful, purposeful, tactful* “Have N”

本発表では、第一に、名詞由来性質形容詞には、これらに加えて Prototypical 類 “Represent N” とでもいうべき類があることを示す：

- (2) This sentence is *grammatical*. “Represent N”

第二に、Prototypical 類は、Similative 類と形態が明確に区別されていることを示す。Similative 類は (1) のように接辞で作られる。他方、Prototypical 類は、接辞で作られることもあるが、多くは、関係形容詞という内項をとらない名詞由来形容詞からの「転換」で作られる。関係形容詞は分類機能をもち (島村 2014)、“of N”をはじめとする前置詞句の限定修飾に対応する (Nagano 2013)：

- (3) *grammatical faculty* “of N”

形の変化を伴わずに項構造が変化する点で、関係形容詞と Prototypical 類の関係は、英語の自他交替に似ている。

第三に、Prototypical 類の内項は、基体 N に対して (2) のように Category-membership の関係にある場合 (基体 N がカテゴリーで内項がその成員) だけでなく、その関係にない場合もある：

- (4) Is Peter still *ungrammatical*?

(2) の構文は、関係形容詞がゼロ名詞句を修飾する Null-headed nominal 構文からの素直な拡張に見えるが、(4) の構文はそうではない。(2) と (4) の構文の関係について検討する。

大会会場（秋田カレッジプラザ）へのアクセス

秋田駅から、徒歩約 10 分です。

周辺地図



施設平面図

